

## 初期京焼について

<http://www.kyoto-arc.or.jp>  
(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



仁清 色絵月梅園茶壺 東京国立博物館蔵

初期の京焼といえば、古清水や仁清・乾山の多彩な色絵のやきものを誼しもが思い起こす。日本の中世のやきものと比べれば、ずいぶんとあでやかで色彩豊かなやきものである。日本のやきもの歴史で、これほど完成された領域に達しているものはなかったであろう。

江戸時代初期の陶工、野々村仁清は一体どこでこの技術を会得したのであろう。五彩といわれる色彩豊かな上絵付の技術は、中国ではかなり新しい時代、明代になって生み出されている。仁清はいつ、

どこでこの技術を知り得たのであろう。

古清水や仁清の上絵付が江戸時代前期(17世紀)に現われるのはあまりにも唐突である。前提になる何かがあるはずである。仁清以前のやきものと何か連なりがあるはずである。

もちろん、古清水や仁清以前に京都で焼かれたやきものがなかったわけではない。楽焼・押小路焼・粟田口焼などがあり、楽茶碗のように長次郎から始まり、茶器としてかなり実体のわかっているものもある。しかし、押小路焼のよう

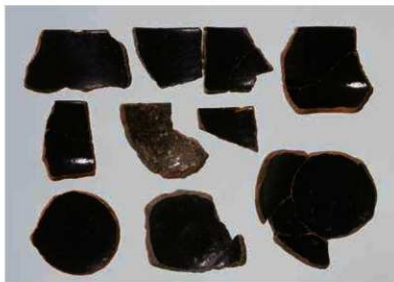
に文献上では記載があるが、具体的にどのようなやきものなのか、はっきりと実体のわからないものもある。

実体のわからないこうしたやきものを知るためには、遺跡の調査によって発見されたやきものを見直してみることが大事である。桃山時代のやきものを抽出すれば、古清水や仁清につながるものを見つけ出すことができるかもしれない。

最近の発掘調査によって桃山時代のやきものが大量に発見され、そのなかに京焼も含まれていることがわかってきた。また古清水や仁清の前身とはっきり確定はできないが、桃山時代に京都で作られたやきもの一群があることは事実である。それを紹介してみよう。

桃山時代の京都で作られたやきものを我々は、今のところ、施釉軟質陶器と総称している。楽茶碗もこの中に含まれ、素地はがさついた粗い土で小砂粒を含み、あまり焼きまっておらず軟質である。赤褐色から橙色のものが多く、一部に灰色から灰黒色がかつたくすべ焼状のものもある。このような素地に施釉された一群のやきものを初期の京焼と呼ぶことにしている。

作り方は「ロクロ<sup>ろくろ</sup>焼き」のものもあり、「てびねり」のものもある。



緑彩のある茶碗の外面(写真上)と内面(写真下)

伏見城周辺や洛中の各所から発見されている。てびねりのもので有名な茶碗が楽茶碗である。また、作り方はロクロ挽きであるが、軸調が楽茶碗によくにているものもある。ほかにロクロ挽きでつくり、緑彩がある茶碗もある。

これらのやきものが京都で作られていたことは、窯道具のサヤ鉢や未製品のやきものが洛中の発掘調査で発見されたことでわかる。サヤ鉢の破片には内側に緑彩が付着しているものもある。また、未製品は白泥が施されたままで軸をかけて焼かれた痕跡はない。これ

らのやきものは小規模で手軽な内窯で焼かれたと考えられる。

この時代のやきもので最も特徴的なのは、緑彩のある茶碗である。作り方はロクロ挽きで、器形は半筒茶碗・小振りの茶碗・天目茶碗などがある。内面は黒軸を施し、外面は白泥をかけた後に透明軸を施すが、緑彩を施す段階が透明軸のかけた前か後かはまだわかっていない。軸は黒軸・透明軸とも鉛を含ませて融点を下げた鉛軸系統のものである。出土量はそれほど多くないが、洛中では各所から発見され、かなり一般的なも

のである。

この緑彩のある茶碗の特徴の一つに白泥をかけることがあげられる。白泥は中国の陶磁器には古くから一般的な技法としてもちいられてきたが、日本のやきものではこれが初源である。素地の色を白でおおい、白地に色彩を施すことによって従来の色感を越えるあてやかな色合いを出すことができたのである。この初期京焼が中世のやきものに比較して、色彩感覚あふれるのは白泥によるところが大きい。

この緑彩をよくみてみると、色をつけている筆の痕跡が認められる。筆で緑彩されているが、緑彩の軸垂れは口縁の方に向かっている。緑彩された後に、口縁を下にして置かれたことを示している。

緑彩が軸の下にあるのか、軸の上にあるのか議論が分かれるところである。軸の上であれば上絵付につながることも考えられ、古清水や仁清の上絵付を理解するうえで示唆的である。

これらのやきものがストレートに古清水や仁清につながらないのはもちろんである。しかし、白泥をかけ、単色ではあるが筆で色彩を施していることは、ほんのわずかな一脈ではあるが、古清水や仁清の製品につながる要素としてみることができる。

また、楽茶碗以外の茶碗が京都で生産されていたことは間違いない、これらのやきものを初期京焼として認知して出発することは、京焼のこれからの研究にとって重要なことである。